東北教区3回忌法要

被災地でシンポジウム

追悼、支援活動、展望テーマに4人が発表

東日本大震災から2年を迎え、震災が発生した3月11日を中心に各地で犠牲者を悼む集いや法要が営まれた。宗門は同日、本山・阿弥陀堂で3回忌法要をつとめた。また、被災地の寺院や仮設住宅でも多くの人がともに手を合わせた（次号詳報）。7日、東北教区・東日本大震災3回忌追悼法要が仙台別院（仙台市青葉区）で営まれ、法要後、パネルディスカッション「東日本大震災復興支援―現状と今後の活動」を開いた。参拝した教区内の僧侶・門徒やボランティア、宗派の呼びかけで集まった奏楽員ら180人が震災の現状を学び、今後の活動を模索した。

パネルディスカッションは多くの命が奪われた現場で直面した「追悼」、心に寄り添う「支援活動」、長期化・複雑化する被災地の課題を考える「展望」などをテーマに開かれた（写真）。4人のパネリストの発表（要約）は次の通り。

ご本尊が大きな依りどころに

●湯澤義秀・東北教区相馬組長

多くの方が家族や自宅、仕事をなくし、相手がいても自分の赤裸々な胸の内を伝えることができなかった。住職にさえ相談できない中、ご本山や各地から届けられたご本尊が、ご門徒の大きな依りどころになった。

真宗門徒の移民の歴史が根底にある相馬地方は、地域の連帯感やお念仏の絆が強い。今は宗派の福島県復興支援宗務事務所（福島市）を中心にご門徒とのつながりを確かめ合っている。地元でお寺とコミュニティーを再建するのが一番の願いだが、ご門徒も避難する寺院も元の場所に戻れるかもわからず、将来の展望を立てることができない。どうしていいのかさえわからないが、何年かけても相馬の地がもう一度お念仏繁盛の地となるように頑張りたい。

自分を責める人に対し話を聞く

●若山陽子・ともだちin名取事務局長

震災直後、ご家族を捜す方に付き添って歩いた。遺体に対面し「会えてうれしい」と漏らされ、「いがったな」と肩を寄せ合っていた。遺体が見つかり喜ぶ姿を見て、何て悲しいことだろうと感じた。

一昨年5月頃から本願寺さんと協力して仮設住宅でお茶会を開く。コミュニティーの再生を目的にしているが、避難生活の環境や支援などの待遇の違いから、被災者間で対立の構造ができている。

今は違う地域や仮設で暮らす以前のご近所さんが集まれる場所を、と、農家のビニールハウスや倉庫を借りてお茶会を開くこともある。顔を合わせることで「お互い大変なんだ」という気持ちになれる」と喜ばれた。

「大切な人を助けられなかった」「自分だけが生き残った」と自分を責める方が多い。

東日本大震災から2年

話を伺うことが自己肯定のきっかけになり、他の人の苦しみも理解できるようになれば、「あの人も大変なのかな」と思える次の段階に進めるのでは。

お互いが支援者被支援者の立場

●馬場照子・NPO亘理いちごっこ代表理事

地域内外の人が集まれるコミュニティーカフェレストランを立ち上げた。「お互いが支援者・被支援者」という相互扶助の立場を大切にし、さまざまな取り組みをしている。

地元を離れた人との交流を目的にホームカミングデーを開いているが、関わった人同士がつながることで、大きなホーム（家族）になればと願う。

震災後、被災者を取り巻く状況とともにコミュニティーの形態は変わり続けている。支援の対象を特化せず、地域を超えてすべての被災地、そして全国がつながらなければ。「復興・再生」ではなく、「新興・新生」。みんなで元気になる仕組み作りを発信したい。

仮設一軒一軒を訪ね思いを聞く

●安部智海・京都自死自殺相談センター相談員

仮設を一軒一軒訪ねている。「僧侶です」と話すと読経を頼まれることもある。相手の気持ちに焦点をあてて聞くよう努めているが、被災状況はさまざま。追悼の仕方や苦悩の様子も多様化している。死にたいほどの気持ちを誰にも打ち明けられない、一人ぼっちの人は多い。一人一人の気持ちを受け取っていく活動は今後いよいよ大切になってくる。活動を継続するために地元の人の参画を呼びかけていきたい。